

校友さんや

立命館大学産業社会学部校友会報

編集人 片岡雅彦

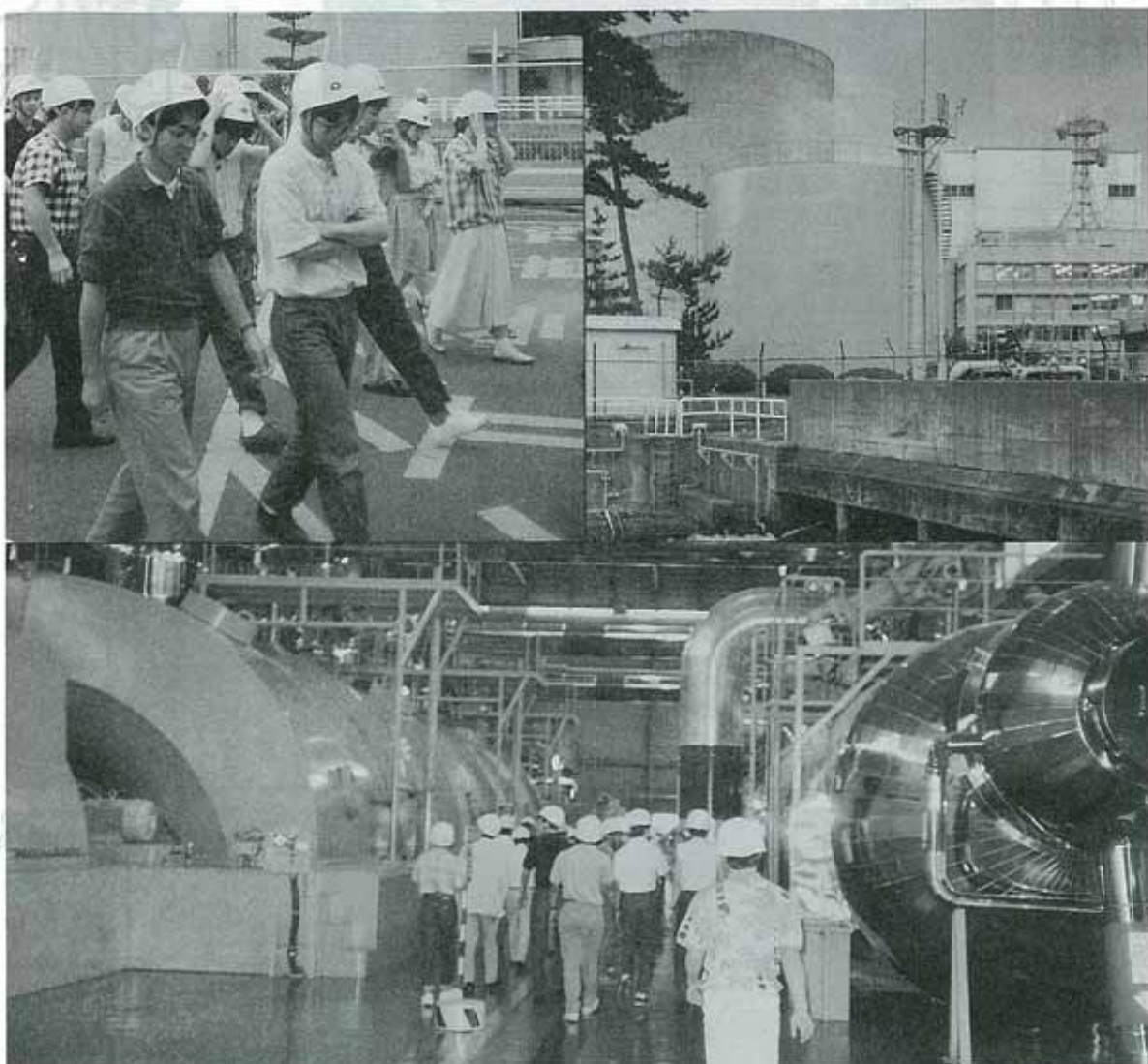
発行人 荒岡作之

発行所 産業社会学部校友会
〒603

京都市北区等持院北町56-1

電話 (075)463-1131(代表)

振替 京都3-19595



美浜原子力発電所(第三回産業労働部門ゼミ合同の工場見学でのスナップ)

エントツがみえる
タービンがみえる
ごうごうと流れる水の音がきこえる

はじめてかぶるヘルメット
いがいに似合うやつがいる
帽子よりすこし重い

流れ星のような一生のあいだに
僕はどれほどを知るだろうか

目のまえに広がる光景も

あんがい

太平洋に沈む石のひつかもしれない

そして僕も……

でも、それは

間違いない本物だ

そして

あのひとと語りあった

遠い日の思い出と一緒に

きっと……

(題字は元総長・細野武男氏)



(伊勢・小学校教員勤務)

三回生の一月に結婚して早十一年半が過ぎた。卒業した年の夏生まれた長男大介は小学校四年生、仏教大学の通信教育で小学校教員免許を取り、就職した翌年生まれた次男研太も、二年生

家庭崩壊などの理由で家族とはなれず、子供達の生活の場である児童養護施設の指導員となつて七年目。就職して数年後の結婚当時、宿直を含む交替勤務を続けながらの二本立ての子育てについて、心境複雑なるものがありました。

たぐいまれいお母さん労働者との数々の出会いの中で励まされ、そして学生時代の先輩でもある夫の絶大な協力と施設の子供達の祝福の下に、勤らく母親。となつて二年と少々。生後四ヶ月からの保育所暮らしで歌とおどりの大好きな娘の成長を確認する度に、零才からの集団保育が子供の発達にどう

社会福祉法人養護施設(ばさ園勤務)

師達藤澤先生がしのばれます。我が子が保育園生活を通して育つ姿は、また私の職場での集団主義養護実践への確信にもつながるものです。

行軍路線下、社会福祉への攻撃が激



筆者と芽衣ちゃん

●山川靖子さん

(旧姓入江55・3卒)



左より筆者、次男修平君、長男耕平君、御主人

●大下純子さん

(旧姓松永47・3卒)

産社を巣立って、もうかれこれ十五年がたとうとしている。実に早いものである。そして今では小学校六年生と二年生の二人の男の子の母親である。もちろん仕事も続けて来たので我が家は共働き家庭であり、子供達は保育園っ子であつたし、学童っ子なのである。従って私の子育ても保育園と共にあつたしその中で親自身も育てられた様に思う。共働き家庭はどちらも同様で時間や暇が無いのである。これは一見不利な条件のようであるが、そのお蔭(?)で子供は自分の事は自分でしない事に親に期待出来る。朝は自分達で起き水筒に茶葉を入れ学校の用意をして出かけて行く。私は子供に言うのである。「親でも子供でも自分の事は自

特集



と子育て

泣き笑い人生奮戦記



●佐久間圭子さん

(旧姓高橋51・3卒)



左より筆者、長男大介君、次男研太君

学してからは放課後の児童保育とたくさんの人達に育てていただいている。家の中では、家族の一員として、できることから少しずつ家事を分担させるようにしてきた。食後のテーブルの片付け、食器洗い、床ふき、洗たく物たたみ、カレーやハンバーグ等簡単な食事作り、とできることも次第にふえてきた。しかし、長男には年令相応の家事を教えたが、次男はいつまでたっても幼い気がし、なかなかやらせられていないことが目下の悩みである。子ども達が保育園や児童保育でお世話になる中で、親としても、保育所運動、児童保育運動にかかわりながら、社会に目を向けた子育ての必要性を感じてきた。

(高槻市立三箇牧小学校勤務)

「はよ起きない。遅刻するんな。」小五の娘を頭に三人の子とも達は、そろって宵つばりの朝寝坊、毎朝、ヒスリックに叫びながら一日がスタートします。分刻みで追われるように、せ

まい家の中を走り回り、ようやく子ども達を保育園に送り届け、職場にたどりついた時は、はじめてホッと一息つくような有様です。夜は夜とて、帰りは遅く、夕飯は手抜きでワンパターンと



筆者と長女香奈さん、長男新悟君、次女莉奈子ちゃん

●藤原香代子さん

(旧姓白井47・3卒)

戦後強くなったのは、女性と何とやらと言われる一方で、妻が専業主婦の場合の夫の家事参加は一日三分などとも言われています。「憲法を家庭に生かす」ことはまだまだむずかしいのでしょうか。今号では仕事に、育児にと奮闘中の皆さんに、「産社ファミリー」の子育てについて語っていただくことにしました。

現代社会と私

大学生協のことなど



藤原壮介 教授

今年夏、大学生協の全国教職員交流集会があつて鹿児島に行つてきました。産社では事業室の中別府さん、共同研究室の徳田さんが一緒でした。

この六月から立命館大学の理事を引受けたのでその関係からの参加です。生協協会の経験は、私にとっては東北大学生協の創立初期(昭和二十四年)にそれという自覚もなしに手伝つて以来ですが、その頃はお米もまだ切符制でしたから、もう古い話です。東北各地から研修に参加した小・中・高校の先生方に昼の給食を行つことが私の担当した主な仕事で、いわば食堂部発足を目標とした基礎固めですが、チーフの先輩が居たので気楽に、ふりかえつてみればアルバイト気分で行つていたような気がします。それから三十年、大学生協は事業の展開はもとより、理論・理念の上でも大きな発展が感じられます。

昨年十一月に出版された福武直先生(全国大学生協連会長・社会保障研究所長)の「大学生協論」(東京大学出版会)は、大学生協を「本来の教育の場」に大学がなるために欠くことの出来ない「大学における重要な組織」と位置づけ、「自主的民主的人間形成」という教育的機能を、生協運動の中でも重視しています。「食えない」時代の生活のための組織であった頃を経験し、その延長から生協を学生のための福利厚生活動という経済的役割の面で見がちだった私は、「教育的機能」が生協活動の中でも、また大学内の組織としてもキチンと位置づけられ重視されていることに目撃したものでした。

六月の総会で立命館大学の理事に選出され、常任理事(副理事長)として色々々な合に出張することになった、まず感じたこともこの点に関連しています。学生理事、委員の諸君が生きて、肩肘張つた所もなく実に楽しそうに活動しています。活動は、クラスの要求や「一言ポスト」の内容を生協の書籍、購読、食堂、共済等の事業に反映させることを中心に、健康、平和、読書推進、文化・レクリエーション等、各分野に広がつていっています。

大学という難しい組織の中で全教職員、学生、また大学自体にも責任を持つて、しかも経済組織、協同組織という根本に立つて問題を考え活動するのですから、たいへんなことには違ひありません。理事会でも教職員や専従職員から色々々文が出たりします。しか

し、学生と教職員が対等に、全学的な福利厚生事業の運営に参加するという経験は、大学生協や志向の各面を原則的に問い直す機会を提供するのでしょ。うか、経済組織の中で働く上に必要な常識を備えた、有能な学生諸君がたくさん育っていることも、実感でわかります。



福武先生の本は、教職員の役割についても新しい位置づけを与えています。それは大学生協を大学コミュニティの重要な組織としてその発展を展望するのですが、ここで大学生協が学生だけでなく、教職員を含めた大学構成員全体の組織である点が強調されています。教職員の要求に応える事業活動とともに、大学における生協の位置を高め、大学にとって頼りになる存在とな

るために、教職員の積極的な活動が期待されているのです。これは立命館と教職員の関係についても示唆的です。立命館は、三年前に財政基盤をゆり動かすほどの大不祥事に会い、現在もその折の負債(三億六千万円)をかかえて再建途上にあります。幸に再建は順調に進み、教職員等が無料子で貸付金した九千万円も計画通り今年・来年で返済を完了できそうです。この再建が順調に進んできた根底には、学生の福利厚生・生協の灯を消してはならないという金全うあての思いとともに、生協を大学の中に広く深く根ざしたものにしよう、そのためには学生だけでなく教職員にとっても、生活の場として配慮が行き届いた施設と活動にしていこうという、大学生協運動全体の新しい努力の方向があつたことを、改めて見直しました。この方向が一九七八年十二月に提起され、いまは全国ほとんどの大学生協の指針になっているということも新しい知見でした。

さて私の講義担当(労働問題)からすれば、生協は労働金庫や労働者共済等(労働福祉)に関連する問題です。私の主な関心もそこにあります。労働者協同事業とも呼ばれるようにそれは協同組織による事業体ですが、一九五〇年に岡山と兵庫で最初に労働者が設立されて以来、労働運動の一環として労働組合活動を労働者生活の面から支える役割を果たしてきました。だが、高度経済成長期を経てその内容はかなり違つてきています。労働者の生活も組合活動も変化し、事業の外部環境も厳しく、かつ変動的なです。新しい方向として地域生活圏における地域労働福祉運動の構築も叫ばれています。が、現実には遠い感があります。

地方大学の中で



兼田 繁 (第4期生・現福島大学経済学部助教授)

地方大学教師は暇か?

編集委員会からの度重なる原稿の催促に、少しでも面倒な事は一日でもいや一時間でも、いやいや一分一秒でも後回しにし、あわよくばやらすに済ましてしまおうとする意図根性から、提出日の約束を何度か反古にしてきた。こうした私の不誠実な性格を、最近になってやっと理解したかのように、「売れっ子作家でもないのに、いい加減にしろよ」と女房が叱る。そして、「もうどうにもなりまへん、お願いします」という編集委員S氏の悲痛な声、なつかしい関西弁でいさがられつつも覚悟を決めて原稿用紙にとらめつことを始めることになる。

大学で一年のオーバードクターの後に、福島大学に赴任して半年半が過ぎた。採用が決まった当時は、この地方国立大学に、かなりの「期待と幻想」を持っていた。「おもいっきり、自分のやりたい研究ができるぞ」と胸をはずませ、少なくとも「給料は安いが暇はある」と固く信じていた。ところが、

どうも最近では、「売れっ子作家でもない」にもかかわらず、追いつけられぬような多忙感を持つようになつた。何故だろう?原稿用紙にとらめつことながら、ふと考えた。そこで浮かんできた事は、当初、大学教師の研究者の側面しか考えられず、教育者としての側面と、さらには大学という自治組織になつて構成員としての側面について自覚できていなかったという反省である。確かに、この三つの側面を統一的に追求する力量がないと、いたずらに多忙感と消耗感を増幅させるだけである。

大学における集団的教育 ところで、大学教師の教育者としてのあり方も、ひとつの転換期を迎えていると言われている。従来、大学の授業は、教師の研究業績、豊富な経験、人間性によって練り上げられた内容と、学生達の真理と正義を探究する青年らしい情熱的態度との接点の中で、いきいきと展開していくものと考えられていた。しかし、「大学の大量化」が言われるようになって、教師と学生との関係が変化してきた。それが教師の信から「学生」異星人であるとか、学生の否定的側面を列挙する「学生デメ論」の展開となって表れる。そして「最近の学生は授業に意欲を持って、くらくらいつくことがなく、大学教育に情熱を失つてしまつた」という嘆きになる。こうなると、個々の教師のバラバラな努力だけで解決できる問題ではなくなってくる。福島大学経済学部では、カリキュラム改革を軸にしながら、教師集団としての対応を十数年来試みてき



20周年記念パーティーより 左端が兼田さん

地域社会の要請

地方大学の教師を多忙にさせる要因には、もうひとつの事情が加わる。それは、様々な意味での地域社会の要請である。公民館の学習講座の講師や、新聞の地方版特集記事へのコメントや、各種団体の集会的助言者や、市町村の総合計画のための調査や、市にかけ多岐である。それらのほとんどが「たのまれ仕事」であり、自分の研究と直接的に関係するものは少ない。しかし、他に適当な人を紹介しようと考えてみても、相対的には自分が最も専門に近いということになり、断わりきれないことの方が多い。さらに、社会学などという一般には理解されにくい学問分野になると、無責任にも「なんでも社会学」といって押しつけられる。そのために、「被害」を受けて地域問題の解説にひきまわされるウェーバー研究者やマルクス研究者も、地方大学ではめずらしくない。

ところで、地域社会の要請に応えるという場合、「たのまれ仕事」に個別的に対応するだけではない。むしろ、自主的な研究者集団としての地域研究の蓄積や、民主的な科学者運動として地域問題に取り組むことが重要である。小規模な地方大学としては、それをなす研究者層が厚いといえない。だからこそ、専門領域外の「たのまれ仕事」に「多忙と消耗」をくりかえすことになる。

福島大学は、教育学部と経済学部の二学部であり、新学部を増設して「総合大学化」は、大学としても地



辻 ゼミ

「酒」と辻ゼミ
四回生 中村友一

私達のゼミは調査実習ゼミで、一つのテーマを調査するのに長い期間がかかるため隔年で開催されています。今年が調査しているのは伏見の地場産業である酒造業です。一年目の去年は事業所調査をして中間報告をまとめ、今年は従業員調査と地域調査を行っています。何故テーマとして酒造業を選んだのかというと、地理的に京都に近く何れも足が運べる、そして辻先生も含めてゼミ生全員が酒好きという点です。私達のゼミは六人しか居らず人数が少ない為まとまりが良く最近では月一回のペースでゼミコンパを開いています。

一般に調査実習ゼミはしんどいと思われておりゼミを決める時に敬遠する人が多いのですが、それだけに一度入って真剣に取り組めば大変よい仲間ができます。私達のゼミも皆非常に仲が良く信頼しあっており、いつも「人数が少なくて良かったなあ」と言っています。

ゼミ活動では伏見で集めてきたデータをコンピュータで集計、各自で担当の部門別に分析してワープロで報告書を作成しています。このように酒造業という伝統産業を近代的に分析する、それが私達辻ゼミの姿です。

(写真は和歌山で行った二泊三日のゼミ春合宿、テニスチーム)

ゼミ同窓会的美徳と悪徳

59年卒 飯田洋一

ゼミ同窓会的美徳と悪徳について考えてみましょう。まずは美徳から。これは変化です。卒業後の波乱万丈は集まったゼミの仲間達を決して驚かさず、かえって元気にさせて、その上得た気分にもさせるものです。

ならば悪徳は、これも変化です。ただしゼミの仲間達の関係の変化、ちょうど良い例があります。五十九年卒の井上ゼミ。図々しい男が居ました。石の上の三年が過ぎ、悩み多き四度目の夏を迎えたある日、三条のしやれたチャイナレストランに五十九年卒の井上ゼミの面々が集まりました。皆さん祭り好きなのか、こうして集まるのも少なくない様子。このチャイナレストランは奇妙にもインドの歌謡曲が流れていて、象やマッコウジラが老酒

吉備の里に感う

片山 智

(現・就実女子大学教授)

退職された先生はいま……

私は新設された産業社会学部に赴任し、三十才台初めから四十才台半ばまで、十二年間勤務しました。已むを得ない事情で郷里に帰って早や十年が経ちました。私の立命館時代は、学園紛争や衣笠移転など、変化の激しい時代でした。帰郷した頃は、京都で養われた情熱を抑え難く、職場で科長や学部長の役職を勤めながら、妻の協力で子供劇場をつくり発表会を開いてきました。今でも県北の蒜山地方の花の写真を撮って展覧会を催したり、スベイ

ン語の学習を始めたり、新しい世界を探索なさやかな試みを続けています。現在、岡山市の女子大で英語とアメリカ文学を担当していますが、二十世紀に向けて、女性の理想像を模索しながらも、年令の差からくる学生との違和感に、もどかしい思いを募らせています。大人の責任を棚上げして、「新人類」と割り切って白眼視する教員も持ち得ず、さりとて変り行く時代の中で、青年の豊かなエネルギーを伸ばす有効な手助けにも確信が持てない有

様です。この惑いから一日も早く卒業する為にも、自己の世界観の確立を目指して、「科学と宗教」「西洋と東洋」の問題に、体力の続く限り、雑用の合間を縫って取り組み続けようと考えています。その時私を助けて呉れるものは、矢張り、産業社会学部で接した立派な先生方や同僚、そして青春時代を真剣に斗っていた学生の教えであり姿です。その意味で、京都での十二年間に対する誇りと感謝の気持ちを、私は年を追うごとに強めています。



井上ゼミ

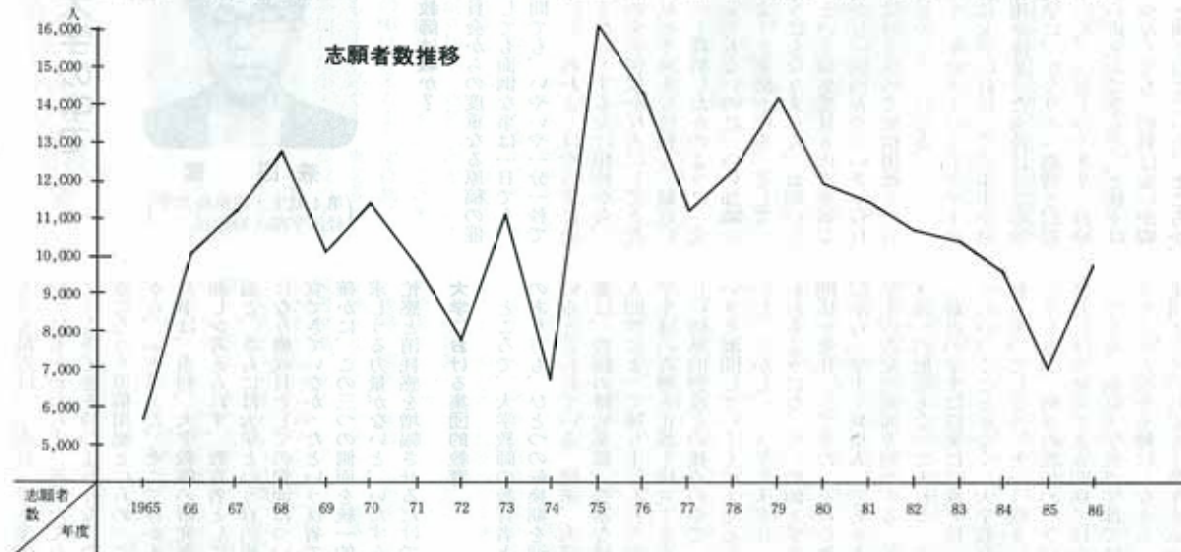


入会の
おしらせ
お願い

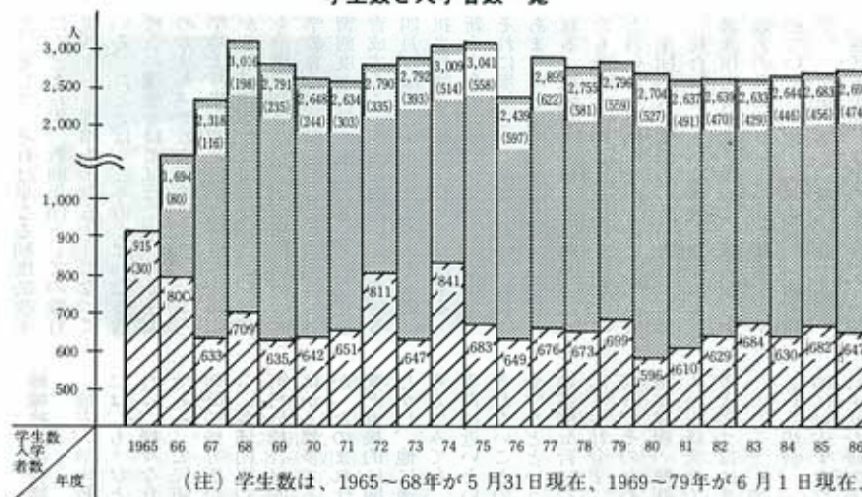
終身会費 三千元
入会される方は同封の「振込通知票」に必要事項をご記入の上ご送金下さい。なお既に送金済の方は不要です。さらに学部創立二〇周年を記念して作成いたしました「学部づくりの二〇年」(産業社会学部二〇年小史、すぐに役に立つゼミ担当者名入りの既卒者名簿(第一期生一九八四年三月卒を共に三千元(送料含)にて頒布しておりますので、ぜひこの機会に合わせて購入していただくことをお願いいたします。

産業社会学部の志願者数・入学者数・大学院生数の推移表

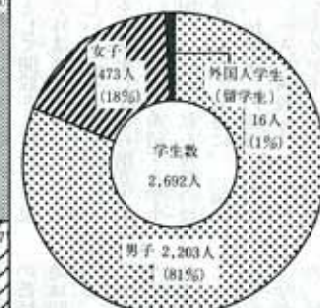
これまでの産業社会学部の推移を表にしてみました。皆さんの入学時の状況とも較べてみてはいかがでしょうか。



学生数と入学者数一覧



学生数()内は女子学生数
入学者数



※1980年8/1現在の学生数の内訳

(注) 学生数は、1965～68年が5月31日現在、1969～79年が6月1日現在、1980～82年が5月1日現在、1983～86年が6月1日現在

社会学研究科 志願者・入学者・在籍者数等の推移

	前期課程		後期課程		在 籍 者				試 験 者	
	志 願 者	入 学 者	志 願 者	入 学 者	前期課程	研 修 生	後期課程	研 究 生	前期修了	後期単位取得
1972年度	11	4	—	—	4	—	—	—		
73	23	4	—	—	8	—	—	—		
74	42	5	5	2	9		2	—		
75	37	4	4	3	9		4	—	1	
76	48	2	7	5	5	1	9	—		
77	46	2	4	4	5		12	1	1	2
78	34	2	3	3	4		12	2		2
79	20	2	2	2	4		9	5		2
80	12	1	2	2	3		7	7		2
81	23	3	3	2	4		6	8		
82	16	0	1	1	3		5	10		1
83	28	2	1	1	4		4	11		
84	17	0	0	0	3	1	2	13		1
85	27	2	3	2	1	0	3	12		2
86	19	4	0	0	5	0	2	5		
合 計	403	37	35	27	72	2	77	74	2	12

大学院生の就職先一覧表

大阪経済法科大学
長 野 大 学
鹿児島経済大学
福 島 大 学
山 口 大 学
札幌学院大学
桃山学院大学
八代学院大学
高校教員他

さんしゃ
RANDOM FILE

前号において「国際化の時代」ということで留学生の受入れについてふれましたが、そのほか「帰国生受入れ」、「海外セミナー(短期外国語研修)」、「スポーツ選抜入試」など一九八七年度にかけてつぎと実施される段階にきており、立命館大学では二一世紀の学園創造にむけて大きく動きだそうとしています。

産業社会学部では学部刷新が検討されており、以下その内容について学部の動きとして紹介いたします。

産業社会学部は、学部創設以来二十余年になりますが、その間、研究と教育の改善に向けて幾多の努力を重ねてきました。

今次の学部刷新はこれまでの到達点

今回は今年四月に赴任されました木津川計教授(芸術論担当)に、「立命館にきてからの印象について」原稿をよせていただきました。なお、木津川先生には十一月三〇日の「産業社会学部校友会」第二回定期総会にさきだつ「文化講演会」の講師としてお願いしています。



木津川 計
本学部教授

大学に赴任して

研究室の長い廊下を歩きながら、ふ

をふまえながら、①この二十年の「社会」と「人間」の変化をふまえ、今日の学問的要請にこたえること、②今日なお残されている教育改善の諸課題を現実の学生実態、学生の勉学要求をふまえながら本学的に解決すること、③本学部の研究を進展させ、大学院教育の充実をはかること、を課題とした改革です。

後者は、学部創設以来二十年間の「社会」と「人間」の変化を見据えながら、多様な形態の「現代的貧困」、退廃をはらんだ文化・イデオロギー状況のもとで、「人間」に焦点を合わせることにあつて社会科学をより豊かにしていくことです。さらには、八〇年代に入つての社会の複雑化と、新しい困難のいっそうの増大という事態にこたへるために、政策科学化をすすめることです。

四コース制の検討

以上述べてきた点を具体化するため、本学部では、現在四コース制を検討しています。

それは「産業・社会」・「都市・生活」・「発達・福祉」・「人間・文化」の四コースです。

とすることがあつた。ここを歩いている私は、何かの間違ひでまぎれこんでいるのだ、と、私の名前の表札が掲げられている部屋に腰をおろしても、なぜここに座っているのかを疑ふこともままあつたのだ。

はたばたと足音がし、学部長と人事部長が、「君を招いたのは当方の手違い、即刻、この部屋から立ち去られたい」と告げにやつてこられるのではないか、などと思つた春の午後が本当にあつた。

非常勤でよその大学へ参つた経験は何年かあつたが、まさか、専任で招いて下さる思いよりもなかつたから驚いていたのだ。信じ難い思いのまま、

第二回定期総会開催のお知らせ

「産業社会学部校友会」が設立され、この秋で満二年を迎えます。

会則第九条(総会)「二年に一回定期総会を開催する」により左記の通り開催いたします。

記

開催日 一九八六年十一月三〇日(日)
時間 役員会 午後一時(中川会館三三三二四号)

記念文化講演会 午後二時(末川記念会館ホール)

演題 「大阪・神戸・そして京都」
――関西三都の文化風土――

講師 木津川 計 本学部教授

総会・懇親会 午後三時(中川会館4F大会議室) 会費三千円

出席者については、同封のハガキで



産業社会学部校友会設立総会

退去命令が出るまでは、素知らぬふりをしていようと思つた私の銀行口座に給料が振り込まれてきて、この間違ひは相当手がこんでいる、などとさらに思ふのだった。

が、やはり、ほんまもんなんだろうと少しづつ信じるようにして周囲を見回すと、私は実に立派な大学に身を置いていることに気づくのであつた。

中学生の頃から、存じ上げる大学の学長にお三方がおられた。立命の末川博、東大の南原繁、大阪市大の恒藤恭三の三人の先生方であつた。わけでも、末川、恒藤の両先生は京大事件で大学を追われた抵抗する戦中知識人であつたから、少年の私はいっそう畏敬の

思いを抱き、見上げていたのである。戦後、末川先生が榮かれた、そんな榮光の大学に浅学非才な私如きが招かれたのである。これを機会に、少しは勉強をいたせ、ということなのであろう。改めて、立命館大学と産業社会学部の教授会に謝意をお伝えさせていただいたのである。

詩人安西冬衛といえは、あの名詩、てふてふが一匹、韃靼海峡を渡つていった、の作者である。その安西に「大学の留守」というエッセー集がある。昭和十八年に刊行された。

冬休みの大阪商大に通い、堺市の職員だった安西は、冬枯れの、誰も居ない大学の隅で、ナチス独逸の地方行

